

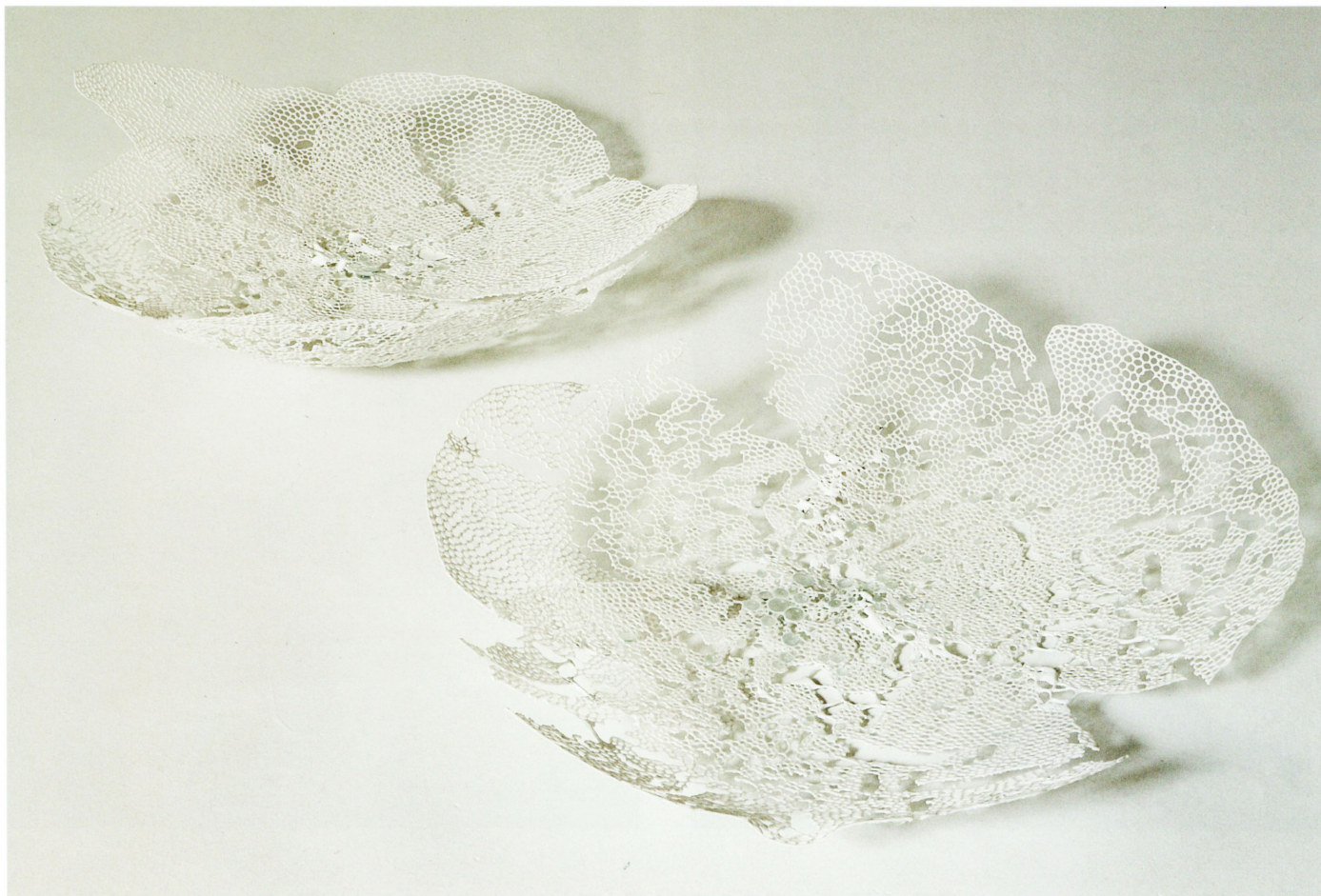
佐藤 静恵

SATO Shizue

素材の特性に特化したガラス造形 —日本と欧米（オーストラリア）の工芸概念の比較を通じて—
作品「weaving glass」及び制作報告書

Special Characteristic of the Material Used in Glass Art – A Comparison of Western Art Concepts, Glass Sculpture, and Japanese “KOUGEI”–

デザイン学領域群 クラフト領域



weaving glass

W750×D710×H190mm

ガラス／スランプ

2014 年

はじめに

本研究では、＜素材と、その特性に特化する＞という筆者自身の造形思考の所以と、その実践が欧米でどのように受け入れられるのかを、オーストラリア留学体験、現地作家・関係者へのインタビューと、国内における文献調査を通じて検証した。

ガラス造形における工芸の独自性と、その造形思考に裏打ちされた作品に対する国外での評価を、作家的観点から検証することは、今までにない新しい試みであり、本論文における美術史の歴史的背景の比較・検証と調査は、自国の芸術文化の再認識へと繋がる。

また、本研究により、ガラス造形における自身の工芸観を確立することが目的である。

第一章：日本における工芸の歴史の変遷

本章では、工芸の歴史の変遷に伴う展開を、文献資料を基に客観的に整理し、＜素材と、その特性に特化する＞という筆者の造形思考の所以と考えられる‘現代工芸’へと繋がる系譜を辿った。

国内で‘工芸’という名称が生まれ、使用されはじめたのは明治初期の頃であった。この頃、外貨取得のための輸出工芸を経て、徐々に工芸は美術（絵画や彫刻を重んじた）に従属する地位に置かれるようになっていった。大正後半～昭和戦前には、作り手の‘個’の覚醒から、工芸は様々な様式を取り入れ、その存在意義を求めるようになった。そして、戦後‘個’の発現へと展開し、内発的動機からオブジェ化する作品も見られるようになった。

80年代に入ると、‘もの派’からの影響により、工芸は改めて素材に目を向けるようになった。昭和戦後に起こった‘個の発現’による工芸のオブジェ化と、造形過程から生じる素材の特性への着目が、現代工芸の造形思考へと繋がる重要な要素となっていると考えられる。

第二章：ガラス造形の歴史と成り立ち

本章では、1960年代以降‘表現としてのガラス造形’が飛躍的に変革を遂げたスタジオグラス運動を基に、欧米のスタジオグラスと日本の工芸概念の違い、それに伴うガラス造形作品に対しての定義付けの違いについて述べた。

元々、欧米には‘工芸’という美術概念が存在しない。さらに、スタジオグラスは、美術分野としての市民権を得ているのではなく、あくまでも造形活動の一手段として見なされていることが、第四章第二節の関係者インタビューからも明らかとなっている。こうした事柄から、スタジオグラスを用いて生まれた造形物は、‘表現としてのガラス造形’であれば、始めから純粋美術、つまりスカルプチャー[彫刻]を目指して作られていることを示唆している。しかしながら、日本国内の認識においては、スカルプチャー[彫刻]が、ガラス造形を包括するとは考え難い。

ここに、欧米と日本では、‘スカルプチャー’と‘彫刻’に対しての認識の違いが生じていることが推測できる。そこで、日本の‘彫刻’と、西洋の‘Sculpture’の間に生じる、認識の差異に触れ、具体的な‘グラス・スカルプチャー’作品を事例に挙げながら例証した。

第三章：美術的観点から見たオーストラリア

現在のオーストラリアの文化・芸術の基盤となっている歴史的背景の概要を辿ると同時に、ガラス造形分野の奨励活動の具体例として、筆者が実際に関係した関係教育機関、ガラスコンペ、興味を持ったガラス造形作家、Ben Edols, Kathy Elliott、浅香昌宏、Tom Mooreを取り上げ紹介し、美術的観点から見たオーストラリアを考察した。

第四章：オーストラリアのガラス造形の現在

本章は、在豪中に使用した素材や道具についての検証と、Michael Scarrone [キュレーター]、浅香昌宏[現地作家]、Jane

Gavan [教育関係者]へのガラス造形に関するインタビュー内容を取りまとめた。

まずScarroneへのインタビューから、オーストラリアにおける、ガラス造形／グラスアートの定義付けとカテゴライズを明らかにし、浅香へのインタビューでは、作家的造形思考を探ると同時に、＜素材と、その特性に特化する＞ことを実践した作品が、西洋文化圏でどのように受け入れられているのかを探っていった。また、Gavanへのインタビューから、ガラスという一つの素材とその分野の在り方に対し、教育的立場からどのように考えているのか、語られた内容から、今後のグラスアート、その作家たちの在り方を探ることを目的とした。

それぞれのインタビューの回答から導き出されたオーストラリアのガラス造形の現在は、定義や前提に捕われない制作活動と、＜素材と、その特性に特化する＞造形思考の結びつきの重要性が明らかとなった。

作品「weaving glass」研究報告書

本章では、筆者が＜素材と、その特性に特化する＞造形思考から実践した作品「weaving glass」について、自己と素材の関係性と、制作プロセスについてまとめた。

おわりに

筆者が今後目指すべき工芸とは、前提としての定義やカテゴライズに頼ることを許されない孤高の表現活動である。また、そうした活動に対し＜素材と、その特性に特化する＞という造形思考が、自身の制作活動における確かな指針と成り得ることを、本研究を通じ確信することができた。本研究を通じ、知り得たこと・気づきを筆者の現時点での工芸観と結論したい。